

## 生物多様性をめぐる動向と可能性

研究員 寺林暁良

### 1 「成長の限界」と持続可能性

世界の人口増加や先進国の経済発展などによって環境負荷が増大するに従い、1972年に経済学者等の集団「ローマクラブ」が提言した「成長の限界」がますます現実味を帯びている。こうしたなか、環境や社会・経済の「持続可能性(サステナビリティ)」という言葉が流行語となっている。

「持続可能性」が浸透する契機となった92年のリオデジャネイロ地球サミットでは、2つの国際条約が発効に至った。そのうちの1つである「気候変動枠組条約」は地球温暖化防止の条約として知られているが、もう1つの「生物多様性条約」は、今年10月に名古屋市で「生物多様性条約第10回締約国会議(CBD-COP10)」が開催されることもあり、これから日本でも認知が広がると思われる。

### 2 生物多様性条約の目的

生物多様性条約では、生物多様性を、種の多様性、遺伝子の多様性、生態系の多様性、の3つのレベルで定義している。

同条約の目的の1つは、「生物多様性」の保全である。しかし、同条約ではそれにとどまらず、2つめに「生物資源の持続可能な利用」、3つめに「遺伝資源の利用から生ずる利益の公正かつ衡平な配分」も目的に置いている。

同条約に後者2つの目的が加えられている背景には、発展途上国において先進国の企業

等が、木材や魚介類などの生物資源を再生不可能なまでに利用することによって、環境破壊や住民生活の破壊といった問題を引き起こしてきたことがある。そして、それを防ぐために生物資源の利用にかかる国際的なルール作りが求められたのである。つまり、同条約は生物資源の「利用」に関する国際社会の政治・経済的な問題を扱う条約としてとらえることができる。

今秋のCOP10でも、生物資源へのアクセスや利益配分に関する枠組づくりなど、今後の環境規制にもつながるような重要な議題が話し合われる予定である。

### 3 生物多様性の「利用」と「価値」

生物多様性を議論する際には、人間による資源の「利用」とのかかわり合いを考えることが重要である。少し前までは、生態学においても「原生自然」が最も豊かな自然と考えられており、環境問題は「環境か開発か」という二項対立でとらえられることが多かった。しかし今日では、人間が適切なレベルで自然を利用することが、むしろ生物多様性を高めることとして評価されている。

また、利用の議論に伴って、生物多様性を高めることによってそこから人間が享受する「価値」についての議論も盛んになっている。その代表が、「生態系サービス」の議論である。「生態系サービス」とは、生物多様性が持つ価値を体系的に示したものであり、これ

には、食料・木材の供給など、経済的価値の大きい「供給サービス」だけではなく、気候調節や土砂流出防止などの「調整サービス」、また、レクリエーションや教育などの「文化的サービス」といった価値が含まれる。

わが国でこれまで論じられてきた農業や林業の「多面的機能」は、概して一般論にとどまってきたきらいがある。しかし、「生態系サービス」の議論は、個別地域に見合った価値を論じようとする傾向が強く、この点が多面的機能の議論とは異なっている。

このように、「生物多様性」は多様な価値を有しているが、それゆえにステークホルダー（利害関係者）が連携・合意形成をもとにその保全に取り組むことが求められている。

#### 4 生物多様性のローカルな文脈

生物多様性の問題は、グローバルな問題であると同時に、地域による利用や地域にとっての価値を論じることから、ローカルな問題でもある。したがって、生物多様性を論じるとは、農山漁村にとっても重要なこととなる。

日本では、里山やため池、水田など、人の距離が極めて近い場所で、世界的にも独自の生物多様性が育まれてきた。しかし、これらの環境は、近代化や地域社会の過疎化・高齢化などを背景として荒廃が進んでいる。

民俗学者の安室知<sup>やすむらさとる</sup>は、かつての水田が稲作の場であると同時に、「漁撈」を行い、畦畔でマメや野草を採取するなど、多様な生物資源とのかかわりが見いだせる空間であったと

指摘している。そして、こうしたかかわりは、金銭的価値だけではなく、自家消費や「楽しみ」としても大きな意味を持っていた。さらに、こうしたかかわりのあった水田は、所有者だけではなく、一定のルールの下で、むらの皆が利用できる「コモンズ」であったと<sup>(注1)</sup>いう。このように、生物多様性は、地域環境にかかわる人々の文化的な多様性や社会的な紐帯にも関係していたのである。

日本の農山漁村では、これまで一貫して農林水産業の効率化と生産性の向上が進められてきた。しかしその一方で、生物多様性とのかかわりから生まれる知恵や文化、共同性が失われ、地域環境は近くにあるのに「遠い」場所になってしまった。

ローカルな場で生物多様性を議論することは、地域環境と地域社会の豊かなかかわりを再生し、地域の多様な価値を見直すことにつながると思われる。しかし、これは「昔へ戻れ」ということを意味しているのではなく、現代的な文脈の中で人々がどのように地域文化を築くことができるか、ということである。

実際、一部の地域では、生物多様性を生産物への経済的な付加価値とし、生物多様性を旗印としてJAや地域住民が協働で地域再生に<sup>(注2)</sup>取り組むなどの動きも見られている。

生物多様性の持続可能性は、地球の持続可能性だけではなく、視点を変えれば、地域の社会・経済の持続可能性の問題でもある。これまで地域で見過ごされてきた価値を掘り起こすために生物多様性の多様な価値を論じる意義は小さくないと思われる。

(てらばやし あきら)

(注1)安室知(2005)『水田漁撈の研究』慶友社

(注2)拙稿(2010)『『魚のゆりかご水田』による環境再生・地域再生』『本誌』1月号